

## 序

# 西村久藏における義なる愛

富崎 豊文

先生の性格は、その父と母とかり、両者のよこ処ばかりを継承して構成されていた。父君の謹直な几帳面さ  
と、母堂の温かな思いやりの心とがそれである。更に先生の信仰は、高倉徳太郎と小野村林蔵の一人の恩師から  
受け継がれ、それが先生の三十八年に亘る信仰生活の骨格をなしていると信ずる。即ち高倉ほゞファンダメンタ  
ル（基本的）といつ語葉を口にした神学者はなく、小野村はどうパティイ（敬虔<sup>(けいけん)</sup>）といつ語葉を好んで用いた牧師  
はなかつた。我々はわが西村久藏において、両者の神学的なものと、敬虔なるものとの混血児を見る思いがする。

これを一言で掩（おひ）えれば、先生の信仰と生活の中核をなすものは、終始「義なる愛」であったと申して過言ではないであつた。その発端は、先生十八歳の青春の頃、始めて一夜、高倉の話を聞き、十字架の愛に触発されて、寝もやらず、パスカルの深夜の体験にも似た回心を迫られ、その翌々日聖母に受洗したといふ。十字架の義なる愛に感泣した青年西村の姿を鬚鬚（ほつぶつ）せしめられたるではないか。

更に我々は「伝道は人なり」の感を深づする。先生は言葉のみの人ではなかつた。義なる愛の実践者であつた。彼は右の手のなすところを左の手に知らせず、幾夜涙をもつて悲しめる者に慰めの手紙を認め、いたしき者に金品を贈つて之を力づけたこと幾度ならんか。彼は口先だけの儀礼的な御挨拶はつそにも言える人ではなかつた。マクルーハンは「伝達媒介そのものがメッセージである」と主張する。余は媒介によるメッセージといつてもむしろ媒介そのものがメッセージだと信ずる。その意味で伝道は人なのである。言（ことば）肉体となつて我らのうちにあるところの言の受肉の原理は、また我々の証（あかし）にも適応さるべきである。わが西村久蔵の一拳手一投足がメッセージそのものであった。ここに信仰と倫理の一體感が存するのである。

一九八〇年七月

（日本基督教団 葉山教会牧師）